童

2010.７、2

本格的な梅雨空が続き、緑が鮮やかに映る季節。雑草の伸び方や野菜の成長が季節の存在を示してくれます。草刈りをする間隔が短くなり、「もう、こんなに伸びたの」という驚きが、植物の生命力と喜びを感じさせてくれます。梅雨は、１年で１番躍動感を感じさせる季節です。

大地の土が、雨で固まるように、新学期にはいり３ヶ月が過ぎ、ようやく子ども達も心身ともに落ち着き、全員出席という日も多くなりました。新しい砂場では、隣に盛られた土と共に、毎日大人気スポットです。（砂と土半々が理想です）。緑いっぱいの大地のスロープでは、シロツメクサを意図的に刈らずにおいておいたので、首飾りや腕輪などを作り、クローバーの上に座って遊ぶ姿も多い毎日です。そして、絵画的魅力的な文庫建築が行われており、ここも魅力スポット。毎日、金槌の音が響き、周囲には、魅力的な宝物である、木っ端や釘を拾う子ども達でいっぱいです。

普通の暮らしの中に、子ども達にとって、大変魅力的な日常がいっぱいです。どれもに共通な事は、それらが創造的にクリエイティブな素材や環境であること、そして、手作業で進んで行けることです。それらと子ども達とを、相互に共通世界で結びつけ、お互いに楽しめる懐の深さと環境を整えて行くことが、大地の教育の一つでもあると思っています。

日常の暮らしの中に、子ども達の魅力的な宝物がいっぱいです。

【２０年ぶり】

２０年前に何もない大地の丘で、妻と長男長女、父母と母の弟である大工のおじさんとで、大地の建築作業を始めました。その日から約３年間、大工さんと２人で、娘のおむつ（当時１歳）を替えながら、２人の子どもを現場の片隅で寝かせたり遊ばせたりしながら、世間話をして作っていました。

今回の文庫建築では、長男はいませんが、当時と同じく、父母、大工さんという同じ顔ぶれが揃いました。私の年齢は、当時の大工さんの年齢であり、皆が変わらず、こうして健康で元気に揃っている事に感激したと同時に、再びこんな事が出来るなんて感無量でした。皆、年齢を感じさせない仕事ぶりや当時と変わらない声や会話ですが、

やはり、１番の劇的な時の流れを感じさせることは、子どもの成長です。大工さんにおむつを替えてもらっていた長女が、大工さんの弟子になって、連日、金槌を握って、一人前に世間話をしながら作業をしている光景。２０年の月日の流れを痛感させられる光景です。子どもの成長は、まさに、人生の流れですね。

人様の飯を食わせてもらってきた娘、たぶん、あのわらの家で研修してきた事は、人生の何年間にも代え難い人間的な成長をもたらしてもらったと感じます。食事、食物への考え方、嗜好、自分自身の体への思いや魂の叫び、大工から草刈りから日常の暮らしのメンテナンスなど、身体を使ってきた自信と体験、そして、何よりも、多彩で多才な大人達に出会い、その生き方に触れ、自分のそだった大地の環境や生き方を客観的に見つめ直し、その精神的成長に、親ながら驚きを感じています。自分の２０歳の頃には、とてもそんな境地にはなっていませんでした。

わらの家から帰ってきた翌日から、いつのまにか、草刈り機の音が外で響いていました。それも、大声の歌声と共に。耳にはイヤホンがあり、音楽を聴きながら、歌いながら草刈りを楽しんでいました。これが「わら流」と言って、連日、あちこち刈っています。この草刈りは奥が深く、刈り後を見れば、どれだけ、心を込めて丁寧に自然への畏敬の念を持ちながら刈っているかはわかります。

ののはな建築現場で、連日作業をしている娘に、子ども達は「ノンノン　ノンノン」と声をかけていきます。決して、子ども達と共に遊ぶわけではないですが、人気者です。大地の子ども達をはじめ、大地で育った娘とともに、２０年前をもう一度体験出来ている今はとても幸せだと感じます。

連日、子ども達は現場周辺に集まり、宝箱にしまう釘や木っ端を探しています。同時に、何も無かった場所に、基礎から棟上げ、そして、家ができあがって行く過程を、外からではなく、普通に日常的に、暮らしの中から一緒に共有して見る、参加することが出来ます。そして、そこで作り上げている人は、特殊な人ではなく、青ちゃんであり、青ちゃんの娘であり、時には、自分の両親でもあるのが、大切な要素です。昔は当たり前な光景でしたが。

子ども達は、大人の人生、暮らしの引き受け方を、言葉ではなく、その姿から感じ、学んでいます。実態のない言葉だけの無機質な知識を一方的に与えられるのではなく、このような現場光景では、実態のある人の有機的絵画的な動きの中で、言葉ではなく、その手作業や創造的な過程が、子ども達に無言の魅力を振りまいているのでしょう。大工さんに「この木もらっていい」「僕、絶対大工さんになる」「私は、女大工になる」「だって、あんなに沢山の釘を口にくわえられるから」等々、こんな会話に囲まれていれば、作業の手が軽やかに進んでしまいます。

何よりも、娘が、実態のあるわらの家で、実態のある多くの仲間や大人に囲まれて暮らしてきた成長の重さを見せてくれていることから、大地の子ども達も、きっと同じような暮らしを大地時代に過ごして欲しいと願いつつ、作業を進めています。